

実践報告

本学におけるアンチ・ドーピング教育について

The report of anti-doping education at Musashigaoka college

高橋 琴美 田本 育代
Kotomi Takahashi Ikuyo Tamoto

Abstract

本報告では、アンチ・ドーピング教育を行っている「スポーツ医学実習」の授業時にアンケートを実施し、アンチ・ドーピングについての理解が得られたかどうか確認するとともに、本学授業におけるアンチ・ドーピング教育の課題について検討及び報告する。平成 28 年度スポーツ医学実習を履修した 1 年生 75 名（健康スポーツ専攻 52 名、健康マネジメント専攻 4 名、健康栄養専攻 19 名）を対象とし、アンチ・ドーピングに関する授業の前後にアンケートを実施し、無記名、自由記述で回答させた。その結果、履修学生のうち 54 名の学生がドーピングについて聞いたことがあると答え、そのうち授業や研修会で話を聞いたことがある学生は 19 名で全員健康スポーツ専攻の学生であった。授業前はアンチ・ドーピングについて、何となく理解をしており、ただ否定する意見が多かったが、授業後はアンチ・ドーピングに対する理解度が非常に高く、ドーピングをただ否定するのではなく、その理由についても理解できていた。また一部誤った認識や言葉の意味を取り違えているところが見られた。今後は、学生がアンチ・ドーピングに対する理解を深められる授業を行うことだけでなく、いかに継続してアンチ・ドーピング教育を行うかを検討し、実践していくことが必要であると考えられた。

Key words : アンチ・ドーピング教育、理解度、継続

I はじめに

ドーピングとは、一般的に競技能力を向上させることを目的として、薬物、方法などを不正に使用することであり¹⁾、スポーツでは厳しく禁止されている。また承認された場合を除き、治療目的で薬を使用し、競技力向上の意図がなかったとしても、アスリートから採取した検体（尿、血液）から禁止物質が検出されると、アンチ・ドーピング規則違反とみなされ、制裁が課される¹⁾。その理由としては、第 1 にスポーツマンシップやフェアプレーに反し、スポーツそのものを否定するため、第 2 に薬物による副作用がアスリートの健康を損ね、場合によっては死に至らしめる危険性があるため、第 3 にスポーツにおけるドーピングが一般社会への薬物汚染へと広がり、一般社会や若者に悪影響を及ぼすためである²⁾。またそれによって社会的信用を失い、支えてくれている全ての人を裏切る行為ともいわれている。2016 年のリオデジャネイロオリンピックの際には、ロシアが国家主導でドーピング隠しを行っていたことが発覚し、一部の選手が大会に出場できなくなったため、世界に大きく報じられた。また、2012 年の

ロンドンオリンピックでメダルを獲得した選手のアンチ・ドーピング規則違反が発覚し、メダル剥奪となったことも報告されている。このようなドーピングを防止する活動の目標は、スポーツ固有の価値を保全することであり、具体的な活動としては (1) 関係者への教育・啓発および情報提供の実施、(2) 禁止物質の流通制限、(3) ドーピング検査、の 3 つよりなっている²⁾。本学では「スポーツ医学実習」の中でアンチ・ドーピング教育・啓発の取り組みを実施しているが、授業履修者はドーピング検査を受けるアスリートから将来の指導者、栄養士など様々であり、1 回の授業でどれだけアンチ・ドーピングについて理解できているのか不明瞭である。そこで本報告では、授業の前後でアンケートを実施し、アンチ・ドーピングについての理解が得られたかどうか確認するとともに、本学授業におけるアンチ・ドーピング教育の課題について報告する。

II 方法

1. 対象

平成 28 年度におけるスポーツ医学実習の履修者

である1年生75名(健康スポーツ専攻52名、健康マネジメント専攻4名、健康栄養専攻19名)を対象とした。

2. 方法

健康スポーツ専攻、及び健康マネジメント専攻の学生に対しては平成28年12月のアンチ・ドーピングに関する授業の時に、健康栄養専攻の学生に対しては平成29年2月のアンチ・ドーピングに関する授業の時にアンケートを実施した。授業前と授業後にアンケートを実施し、無記名、自由記述で回答させた。

3. アンケート内容

以下の内容について、回答させた。

- 1) これまで「ドーピング」について話を聞いたことはありますか。
- 2) 「ドーピング」の良いイメージ、悪いイメージを教えてください。
- 3) 「ドーピング検査」のイメージを教えてください。
- 4) ドーピングが禁止されるのはなぜでしょう。
- 5) ドーピングをする選手をどう思いますか。
- 6) あなたのドーピングに対する意見をお聞かせください(選手のみ回答)。
- 7) 選手にどのようにドーピングを説明しますか(指導者、サポートスタッフを目指している人のみ回答)。

授業後のアンケートでは、1)に変わってどのくらい理解したかを5段階で記入させた。

4. 授業内容

日本アンチ・ドーピング機構作成の資料³⁾を参考に以下の内容を解説した。

- 1) ドーピングとは何か
- 2) ドーピングの歴史
- 3) アンチ・ドーピング活動の歴史
- 4) 世界アンチ・ドーピング機構設立と日本アンチ・ドーピング機構の設立
- 5) 禁止されている理由
- 6) 規則違反と実際の規則違反例
- 7) アスリートの役割と責務
- 8) ドーピング検査とその手順

一方的な説明にならないように、説明の途中でアンチ・ドーピングに関する問題を出し、検査手順についてはDVDを用いて説明をした。履修学生には授業で使用した内容と同じものを資料として配付した。

Ⅲ 結果及び考察

1. アンケート結果

1) アンチ・ドーピング教育の有無と授業の理解度
これまでドーピングについて話を聞いたことがある学生は、54名(72.0%)、そのうちテレビのニュースなどで聞いたことがある学生は35名(46.7%)、授業や研修会などで聞いた学生は19名(25.3%)だった。また授業や研修会で話を聞いたことがある学生は、全て健康スポーツ専攻の学生だった。

授業後に授業内容の理解度について「5とても理解した」から「1よくわからなかった」の5段階で回答させたところ、5が42件、4が25件、3が1件(未記入7件)であり、ほとんどの学生が授業内容を理解できたと回答した。

これは、健康スポーツ専攻の学生は、運動・スポーツに関することを専門的に学習しており、アンチ・ドーピングについて理解しておく必要があるため、他の授業等で情報を得ていると考えられる。また実際に選手としてドーピング検査を受ける機会があることから、所属団体による研修会等を受けていることも考えられる。健康栄養専攻、健康マネジメント専攻の学生は、各専攻の専門性が異なるため、テレビやニュースからの情報という回答になったと考えられる。

授業の理解度が非常に高かったことについては、履修している学生に合わせ、選手の視点、指導者の視点、栄養士の視点から話をしたことが理解度の高さにつながったのではないかと考えられる。

2) - 1 ドーピングについての良いイメージ

主な回答を表1に示した。授業前では「パフォーマンスが上がる、記録が伸びる」との回答が44件と最も多く、次に筋力が上がる19件であった。授業後には「パフォーマンスが上がる、記録が伸びる」が21件と最も多く、次に筋力が上がる7件だった。また「ない(良いイメージがない)」「未記入(空欄)」

が大きく増加した。さらに授業後には「結果に信憑性がある」「スポーツマンとして潔白を証明できる」「不正が暴かれる」といった回答が7件あった。

この質問に対しては、「良いイメージ」を「ドーピングによって得られる効果」と捉えた回答が多く、パフォーマンスの向上、筋力増強という回答が目立ったが、授業後の回答で「ない」と答えた学生が大幅に増えたことは、授業によってアンチ・ドーピングについての理解が深まったことによると考えられる。また、授業後にはドーピングによって得られる効果だけではなく、ドーピングをして勝利した後に得られるものについての回答も見られた。これらも、授業内での問いかけ、解説などからアンチ・ドーピングについての理解が深まったことによって出てきたイメージだと考えられる。「結果に信憑性がある」といった回答については、「ドーピング」を「ドーピング検査」と思い込み回答していることが推測され、今後はそれぞれの言葉の違いを明確に説明することが必要であると考えられた。

表1 ドーピングの良いイメージ

	前	後
パフォーマンスが上がる、記録が伸びる、力が発揮できる	44	21
筋力が上がる	19	7
精神的効果(やる気が出る、体が軽い、頑張る力がわく)	3	2
疲れが残らない	0	3
家族のため、有名になる、お金がもらえる、一時の幸せ	0	4
ない(良いイメージがない)	6	26
わからない	1	0
未記入(空欄)	5	14
結果に信憑性がある、スポーツマンとして潔白を証明できる	0	7

2) - 2 ドーピングの悪いイメージ

主な回答を表2に示した。授業前では「体に悪い」「副作用がある」との回答が15件、「違反・反則」が11件、「記録の取り消し」「大会に出場できない」が8件であった。授業後は「体に悪い」「副作用がある」が37件と大きく増え、授業前の回答にはなかった「社会的信用を失う」、「スポーツの価値を損ねる」、「人生が狂う、全てを失う」、「周りの人を裏切る・迷惑をかける」との回答が見られた。

授業前の回答を見るとドーピングは「薬を使うの

で体に悪い、服作用がある」「違反だからよくない」とのイメージが強いが、授業後では「どのような副作用があるのか」ということを理解した上で「体に悪い」と回答していた。また授業前では見られなかった「社会的信用を失う」、「スポーツの価値を損ねる」、「人生が狂う、全てを失う」、「周りの人を裏切る・迷惑をかける」といった回答が増えたことは、授業を通してドーピングはただ「体に悪い」ということだけではなく、選手を取り巻くさまざまな環境にも大きな影響を及ぼすことを理解した結果であると考えられる。

表2 ドーピングの悪いイメージ

	前	後
副作用、体に悪い、寿命が縮む	15	37
違反、反則	11	3
薬	5	5
ずるい、平等ではない	7	7
記録取り消し、大会に出場できない	8	3
本当の力ではない	4	0
社会的信用を失う	0	9
人生が狂う、全てを失う	0	9
スポーツの価値を損ねる	0	7
周りの人を裏切る、迷惑をかける	0	4

3) ドーピング検査のイメージ

主な回答を表3に示した。授業前では「尿検査」との回答が43件と一番多かった。授業後は「厳しい」「徹底している」が10件、授業前の回答にはなかった「必要な検査」、「面倒くさい」、「恥ずかしい」、「やりたくない、嫌だ」との回答が見られた。また、ドーピング検査を受けるアスリートの大変さやドーピング検査の特徴(義務化されている、拒否できないなど)についての回答も見られた。

授業前は「尿検査」とのイメージが非常に強いが、授業内で検査手順の映像を見たことで、厳正な手順を踏んで検査を進めていること、そのような検査を受ける選手の大変さを理解したことで「厳しい」「大変」といった回答が増えたと思われる。特に選手として活動している学生は、自分が検査を受けることをイメージして「恥ずかしい」「やりたくない、嫌だ」との回答が出てきたのではないかと考えられる。ま

た、授業後には「必要な検査（スポーツ選手が努力した証を認めるためのもの、厳しいけど大切な検査、すぐく監視されながらやることで選手の潔白が証明される）」といった回答が見られ、ドーピング検査がただ大変で厳しい検査ではなく、選手自身を守るための検査であり、選手の潔白を証明する検査であることを理解できたのではないかと考えられる。ただ、この質問に対して授業後に「悪質なもの」「だめなこと」「よくない」と回答があった。これらの回答について、その理由までは回答されていないため詳細は不明であるが、他の質問項目の回答を見ると「ドーピングをしてはいけない」と回答していることから、「ドーピング」を「ドーピング検査」と思い込み回答していることが考えられる。

表3 ドーピング検査のイメージ

	前	後
尿検査	43	8
血液検査	4	1
抜き打ち検査	6	2
厳しい、徹底している	4	10
大変	0	13
薬	4	2
検査方法(人に見られている中で検査、ランダムに選ぶ)	4	0
面倒くさい	1	5
恥ずかしい	0	5
必要な検査	0	12
やりたくない、嫌だ	0	5

4) ドーピングの禁止理由

主な回答を表4に示した。授業前では「実力以上の力が出る」との回答が32件と一番多く、「公平ではない、フェアではない」が15件であった。授業後は「体に悪い、副作用がある」が18件、「公平ではない、フェアではない」が16件と多かった。また、授業前の回答にはなかった「スポーツの価値を守るため」が19件と多く、「反社会的だから」、「信用を失うから」との回答が見られた。

授業前は、薬を使うことで実力以上の力を発揮できるため、公平ではないため禁止されているという考えが多かったが、授業後はそれだけではなく、「スポーツの価値を守るため」という考えが多く見られ

た。これは授業を通して「スポーツの価値」について意識し、理解を深めた結果と考えられる。

表4 ドーピングの禁止理由

	前	後
実力以上の力が出るから	32	7
公平ではないから、フェアではないから	15	16
体に悪いから、副作用があるから	12	18
薬を使うから	6	0
ずるいから、スポーツマンシップに反するから	2	0
スポーツの価値を守るため	0	19
信用を失うから	0	7
反社会的だから	0	8

5) ドーピングをする選手をどう思うか

主な回答を表5に示した。授業前も授業後も「よくない」とのドーピングを否定する回答が一番多かった。授業前では「勝ちたい気持ちが強い」「自信がない、弱い」「なぜドーピングをするのか不思議」との回答が見られた。授業前に5件見られた「何とも思わない、別にいいと思う」との回答は、授業後には0件となっていた。また授業前の回答にはなかった「気持ちも分からなくはない、事情がある」、「自分自身の欲しか考えていない」との回答が見られた。さらに、「かわいそう」との回答は授業前後に見られたが、授業後は自分の意思ではなく、うっかり薬を服用した、他人に勧められたことによるアンチ・ドーピング規則違反に対する回答であった。

授業前も授業後もドーピングをする選手を否定する回答が多かったが、授業を通して必ずしも自分の意思でアンチ・ドーピング規則違反を犯すわけではなく、うっかり禁止物質の入っている薬を服用した、本人が知らないところで禁止物質を服用していたといった場合もあることに気づき、「かわいそう」「事情がある」といった回答が出てきたと思われる。また、授業前のドーピングをする選手を肯定する回答については、授業を通して正しい知識と理解を得たことで、授業後にはドーピングを否定する回答に変わったと考えられる。

表5 ドーピングをする選手をどう思うか

	前	後
よくない	34	44
勝ちたい気持ちが強い	8	1
自信がない、弱い	6	1
なぜドーピングをするのか不思議	6	1
努力していない	4	0
かわいそう	2	5
何とも思わない、別にいいと思う	5	0
気持ちも分からなくない、事情がある	0	3
自分自身の欲しか考えていない	0	2

6) ドーピングに対する意見（選手のみ回答）

主な回答を表6に示した。授業前も授業後も「よくない」とドーピングを否定する回答が一番多かった。授業前では「恥ずかしい、情けない」「スポーツマンシップに欠ける」「努力すべき」との回答が見られた。授業前に1件見られた「体に害がなければかまわない」といったドーピングを肯定する回答は、授業後には2件となっていた。また授業後には、授業前の回答にはなかった「絶対にやりたくない」との回答が6件見られた。さらに、「かわいそう」との回答は授業前後に見られ、「選手が自分の体に責任を持つ」との回答も見られた。

授業前も授業後もドーピングを否定する回答が多く、授業前は選手として恥ずかしいとの回答も見られた。授業後では、「(自分は)絶対にやらない、やりたくない」「ドーピングをした選手とは戦いたくない」といった回答が見られ、ただ否定するだけでなく、自分自身に置き換えて考えることができたのではないかと考えられる。また肯定的な回答が授業前に1件、授業後に2件見られたが、授業前の肯定的な意見は授業後には否定の意見と変わっていた。授業後の2件については、1件は「ドーピング」と「アンチ・ドーピング活動」の意味を取り違えての回答、もう1件は他の質問の回答がドーピングを否定する回答であったことから、どちらも肯定する回答とは言い切れないものであった。

表6 ドーピングに対する意見（選手への質問）

	前	後
よくない	17	27
恥ずかしい、情けない	4	0
スポーツマンシップに欠ける	3	2
努力すべき	3	4
意味がない	2	0
体に悪い	2	3
販売しない、入手ルートを絶つ	2	0
体に害がなければかまわない	1	2
絶対にやりたくない	0	6

7) 選手にどのようにドーピングを説明するか（指導者、サポートスタッフを指している人のみ回答）

主な回答を表7に示した。授業前は「よくない」との回答が8件、「禁止理由を説明する」との回答が7件と多かった。説明する禁止理由については副作用に関する記述が多かった。授業後では「禁止理由を説明する」との回答が一番多く、説明する理由については授業前とは異なり、信頼を失う、薬に頼らない、アスリートとしての自覚を持ち、摂取するものに責任を持つといった選手の自覚・責任に関するものが多かった。次に「使用後（発覚後）が大変」「よくない」といった回答が多かった。また「指導者がしっかりと知識を持つ」といった選手だけではなく、指導者の責任についての回答も見られた。授業前に2件見られた「適度にさせる」といったドーピングを肯定する回答は、授業後には0件となっていた。

授業前と比べて、授業後ではドーピングはなぜ禁止されているのか、その理由を理解し、それを踏まえて選手に指導するという回答が増えていた。また「選手に自覚を促す、責任を待たせる」「指導者がしっかりと知識を持って指導する」との回答もみられた。さらに授業前に「適度にさせる」と回答していた学生も授業後にはドーピングを否定する意見に変わっていたことから、授業を通してアンチ・ドーピングへの理解が深まったことが感じられた。

表7 選手への説明(指導者、スタッフ希望者への質問)

	前	後
よくない	8	8
禁止の理由を説明する	7	12
使用后(発覚後)が大変	4	9
努力を促す	4	1
本当の実力ではない	4	0
選手としての誇り、自覚を持たせる	3	4
体に悪い	3	3
薬に含まれるので注意させる	2	1
適度にさせる	2	0
指導者自身がしっかりとした知識を持つ	0	2

IV 今後の課題

本学でアンチ・ドーピング教育を行っている「スポーツ医学実習」の履修者は、健康スポーツ専攻の学生が中心で、健康栄養専攻、健康マネジメント専攻の学生は資格(健康運動実践指導者、健康管理士一般指導員、日本体育協会公認指導者共通科目)取得のための必修授業となっており、選手として活動している学生から、指導者を目指す学生、栄養士として選手をサポートすることを目指す学生まで、履修者の幅はとても広がっている。そのため、単に同じ内容、同じ説明をするのではアンチ・ドーピングに対する理解を深めることは難しいため、健康スポーツ専攻、健康マネジメント専攻の授業では、選手としての視点、指導者としての視点での話を、健康栄養専攻の授業であれば選手の視点、指導者としての視点としてだけではなく栄養士としての視点での話をすることで、アンチ・ドーピングの問題をより身近な問題として捉え、理解を深められるよう工夫をしている。今回のアンケート結果で、授業の理解度は非常に高かったことから、それぞれの視点でアンチ・ドーピングについて考えることは理解を深めるためにも重要であると考えられ、今後も自分の視点だけではなく、いろいろな視点に立ってアンチ・ドーピングのことを考える機会を提供することが必要であると考えられた。

また今回のアンケート結果から、授業への理解度は非常に高く、授業後の回答からもドーピングをただ否定するのではなく、その理由についても理解し

ていることが感じられた。しかし、その中でいくつか気になる点もあった。一つ目は、これまで「ドーピング」について聞いたことがあると回答した学生は多いが、正しく理解していない部分があるということである。特に「ドーピング」「ドーピング検査」「アンチ・ドーピング」といった言葉の意味を正しく理解していない部分が見られた。これは授業前の回答だけではなく、授業後の回答にも見られたため、今回の授業においても正確に理解していないと考えられる。今後は言葉の意味、違いを正確に理解させた上でアンチ・ドーピング教育を進める必要があると考えられた。

二つ目は授業前の回答では「ドーピングをしていない人も検査で引っかかる」「ドーピングはやってはいけないルールではないから臨機応変に対応してほしい」「やるならほどほどに」といった誤った認識による回答がいくつか見られたことである。このような回答をした学生は、これまでドーピングについて話を聞いたことがない学生だけではなく、テレビやニュースなどで聞いたことがある、あるいは授業や研修会で話を聞いたことがあると答えた学生から得られた回答であった。このことから、限られた情報や一度だけの情報提供では、誤った認識になってしまうことが考えられた。今回、授業の理解度は非常に高い結果であったが、今後アンチ・ドーピング教育を受ける機会がなければ、その理解度がどのくらい継続するのか、不安が残るところである。よって、正しい知識を持ち続けるためにも、継続的にアンチ・ドーピング教育を続けていくことが必要であると考えられた。

本学学生は将来、選手として、指導者として、そして選手をサポートする栄養士やアスレティックトレーナーとして活躍することを目指している学生であり、アンチ・ドーピング教育を受けることは非常に重要なことである。今後は、学生がアンチ・ドーピングに対する理解を深められる授業を行うことだけではなく、いかに継続してアンチ・ドーピング教育を行うかを検討し、実践していくことが必要であると考えられた。

V 謝辞

本調査にあたり、ご協力いただいた筑波大学永野翔大氏に感謝いたします。

VI 引用・参考文献

- 1) 赤間高雄編 (2014) 『スポーツ医学【内科】』化学同人
- 2) 公益社団法人日本体育協会 (2015) 『公認スポーツ指導者養成テキスト』
- 3) 公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構 (2015) 『アンチ・ドーピング研修会資料(2015 12改訂版)』